



馬本多子鏡

三

雜
8
三

13
357
3止





不
 可
 解

と
 美
 三

高野の奥の刈萱

龍
 經
 海
 瑠
 理

わの...とあ...れ...り...あり...源

平盛衰記...
 三任中将維盛の事

少瀧口時頼入道が...
 平家の一門源氏の...

都をおひら...
 西海の浪ふ...
 よひる

あり後三

あり後三

治正五年十一月五日

坪内雄藏氏寄贈

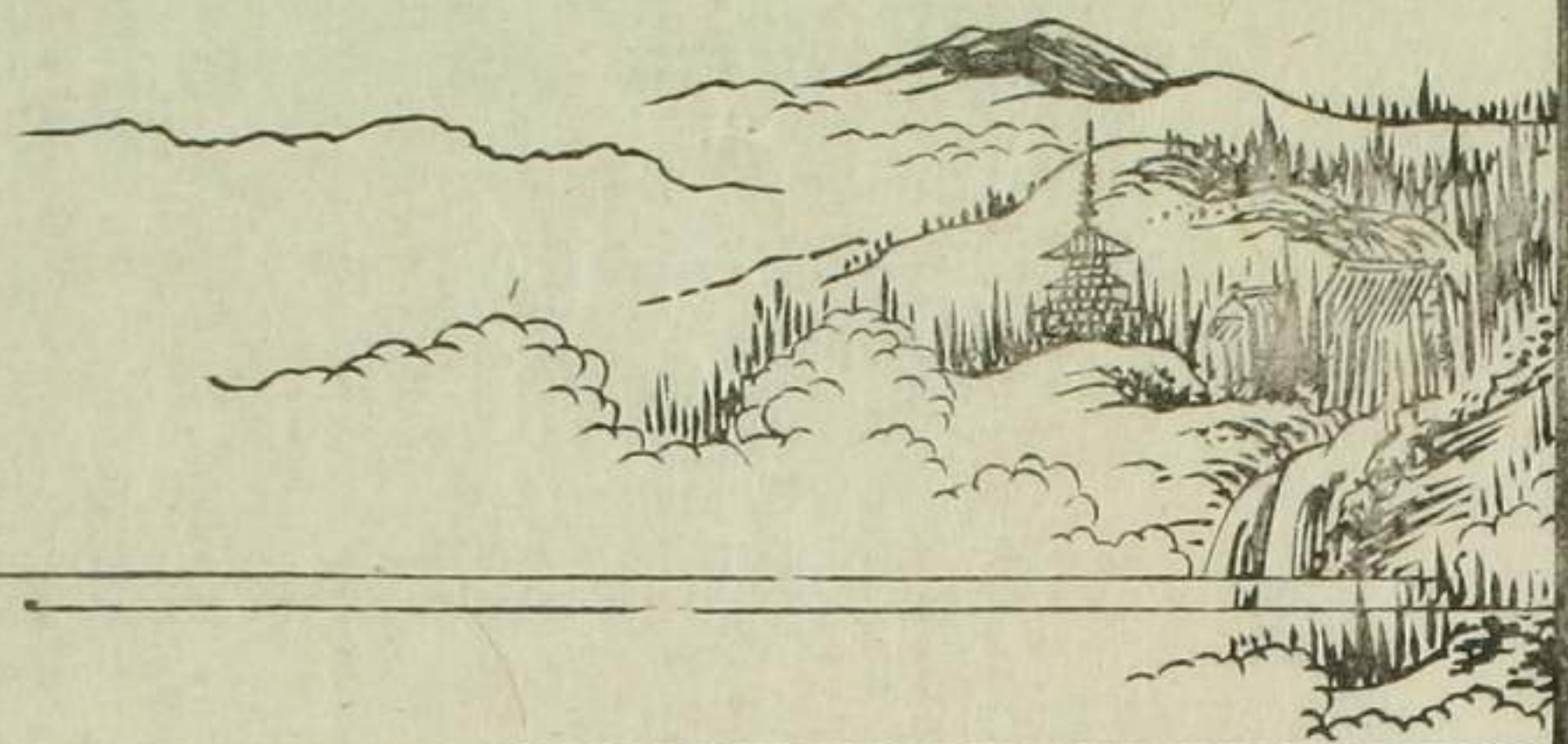


中ちゆうへ故こ小松こまつ大臣おほしの彦ひこ子こ権亮ごんりやう三位さんい中ちゆうね維い
盛さかと雲くもあのおよそふ棄すふをおきこくころらつづ
よくも人ひとちみふおちくくうたまひるるが都みやこ
のそらの鳥とりきりきり響あや乃なわりのとえ
ぬおひふくくあをくぐりけらふよの中ちゆうゆら
きやのくおちたまひて腰こしの侍さむらいよこま
尉ゑい重景じゆうけいと石童丸いしどうまるとくも童武里どうぶりといふ
舎人しやにん二人ふたりを具ぐくくあひてあるとき志しれ

びて屋やの館たねをりぞく舟ふねふくく紀伊きい
園いんれわりの浦うらくつきたまひぬくくそや
あふいのちくくく粉川こながは寺てらお清きよく法然ほつぜん
上人じゆうじんをくくいたほひて念佛ねんぶつ性生じやうじやうの法門ほふもん
を聴き聞きくまそる聖みやこ山やまくまわり時とき入いり及およ
よあいたまひくく堂どうくを巡めぐ礼れいく浄じやうふ出家しゆけ
をとげくまひて法名ほふなを戒法かいほふと号ごうられり
重景じゆうけいと石童丸いしどうまるも得え小刹せうしやく撃げきく戒實かいじつ戒がい

元々のちんぷが
維盛中將
高野詣のふ

うら
三



三

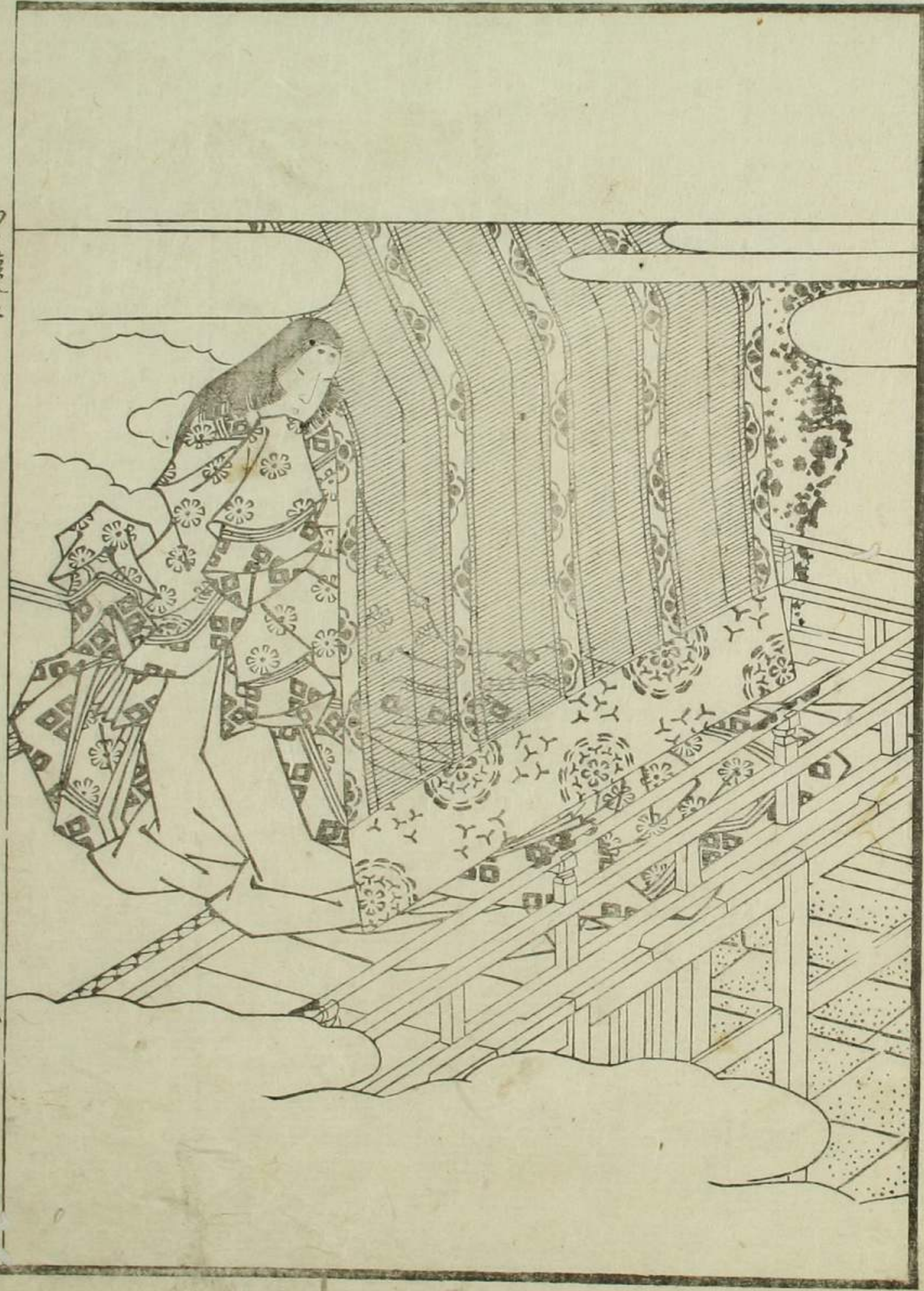


田とつけくらくらくして三少く冬詣仕果と
まいて熊野の深文の王子の市前より小
舟のり金島とらる時一あがりくまひて
つらくおぢきやう今く一人命をさ
くして西海の戦場をのづれりてこゝにやこ
の人のあつさまをともきつたまわくおめよ
ゆゑたれど都のあつりに徘徊せむ源氏乃
ゆゑよ見りごされく憂恥んこと必定あり

まこ屋しまあつれる一門の人このさくらを
そくそくみまらるのくくのみたなき世よ
まらひ居むもくくくとおりをれてくくら
くありける松の本をけがりて権亮三位中
将維盛入道積波屋島の戦場をゆく三所
権現の順礼をとげ那智浦入水一畢元
暦元年二月二十八日生年二十七と書たまひて
奥ふ

うまれていついふもぬてふまゝのそごさごさ
たきせよほごめありけるとかきつけくまゝ都
の人の弾つてふををかきて武里おつのを
たまひて島よりあひおれりたまひぬやぐ
沖おきお漕こぎおろりけるり渺漫びょうまん水面を望のぞみ身を漏こぼ
して没ぼさうひりり守景入しゆけいるも石重九いしむねも俱ともふ
つらそ入いあけり時とき重景しゆけいハ申將まをすと同年ごねんあて
二十七石重九しちじゅうしちいしむねハ十八じゅうはち菜さいありりり武里たけも法あは供ともよ

おくれつてまのらじとおれつて入いらむとさうり
るるを財さい入道いどうおとめて法ご遺言いごんもありる
ものを法み意いりたるをむことあるううとて
あながちつとめつりけれを埋こせんとこれ
あつて法あ書んをとつりむらそをりりけ
この財さい入いとつとつるハ齊せい後ご左さ門もん主ぬし茂しげ水みづ
かふよて維い盛せい中ちゆう於おの法あ又また重しゆう盛せい大だい臣しんつと
とてゆりけるがそのころ建けん礼れい門もん院いんの半はん者しやよ



建礼門院の
川萱
盛後子



横菅川萱とてありらる。川萱ハ越中前日盛
俊相具一々も横菅ハカヤ神崎の遊君
長者ガむまめあてみあもかちもくごひまへん
もたさけもふらうけらう。とさうのあひさめ
白地とおひれれと松蔭のちぎらう色うら
葉菊のちぎらけ白さまりあしてさうらう。切
みぞおひあひらるを父の茂頼のゆきをす
く財教をよびていひらるハよとふえハ今海との

官女也それハ海契をむまひ通むとらふ事
世上ハあまねく披露あるもの事ハ自然
小上聞ハ達さる事もありねどもきをえて孫の
物事せむそのう。このもき人の舞ふたうら
こそ世ハ川。まのこもあまけきはらうし
かぬ女ハ具せんまよ。ちのまこりありやう
さほぐ。ふらうらう。これとも前世のちぎら
みやあまをれがらう。これハ親のりさちんあま

かゝるべきにござらざらんが、浅うござかよひらふ
 茂親の所縁をとき親をま縁きて、いふせん 西詮親
 の命もまごころをひい不孝のわのまうり
 つも勘當ち〜らうらうら〜ときより然〜
 父がまをまうりぞりて、房室あ〜らうり〜つひ
 おひらるゝあはらぢきぬき〜ら〜やわ〜
 ろの世〜はま〜いつ意〜まうせぬ〜ら〜さよ
 〜〜い命を〜ちかめり 七八十あちよも〜はま

か〜ま〜そらご 葉花あちら〜二十年はら〜
 らぢ〜ゆち 差ま〜ら〜の世の中あ〜
 と〜親のあ〜ら〜あや 悪とおわ〜む女〜おんこ お具
 せむ〜ら〜ら〜ら〜あま 災き〜ら〜ときめ
 く人の聲と〜ん〜旦ハ傍軍のわのどわお
 歎〜ふける〜わら〜ん〜わ〜ら〜ら〜
 此後父の教訓〜きん たのふ〜を〜ら〜ひ〜を〜
 逆飛あり不孝父母きん 當道西道と〜る〜
きん



あつた三

九



横笛時入る
 あり
 五下よこ
 三三

さてを終つたを地獄におつて親の命を
まごつて女のまふとひたむきよのうら
みあり暫念を尋ねて却といふ申あふとくもく
ももせうあつて悪縁なり不孝しきつて弃
恩入無為高實報恩者といつて妻子珍寶及
王位降命終時不降者とも説くわりのをと忽
喜抱んを衆くしてこれぞはるべき善知識なり
生年十八歳といつて嗟哉の奥の法輪寺

了入て出家して法名を阿淨とつけると
けり撰筆ハかくともいらす月日ハとてど
も夫ハんんんを音信づもをなすけりハと
能初のちまうかやうつれハのまゝる月星の花
なりけるちまうハあらざりけるをと獨
おひハそれなりたといふが許あそそやハ
され本所ハ衆あそあるハ出仕の止るづま
あつハかつてハ終りハおひハよるハま

かゝりなききありけりなましくくき
ければかりいれくくくつよきめり
らえくくあひて肉裏をまぎれり法論
寺いとたつづきて入道をくらひるふき
あゝ法花經を疏備してありるふまづあづ
もあゝぬ夫の声とききえけれはおとられり
入道障子の間よりこれをえりてよとふとあけ
れを胸うちききとききけつふうれしくおとえけれ

どろろよきくていふまづとくくはらふ
ろづあゝもおひりくひとるおひり声
きもせでうれてあひりりれは女いり
もろらめくもおひりて

あつみおひりりぬるくものほそめり
りりれをちびけとよみまきく桂川のみな
かゝ大堰川のをや凍ふ身を投て亡りり年
ハ十七とそそいりれ入道これをきくありれ

あつたれ〜とねがえてりよくるんま〜と
おとあひるるがそのちさうおふのぢり居るぢり
りり二位中将いかる取嫁もあつたれバ志を〜
いふのこたま〜と

この中将をか藤重氏入居とりるわの〜
なして建礼門院の前堂の名を入道が
おふ負せま〜石堂丸を重氏入居が子乃
石堂丸〜灘口を〜して横笛が喉源

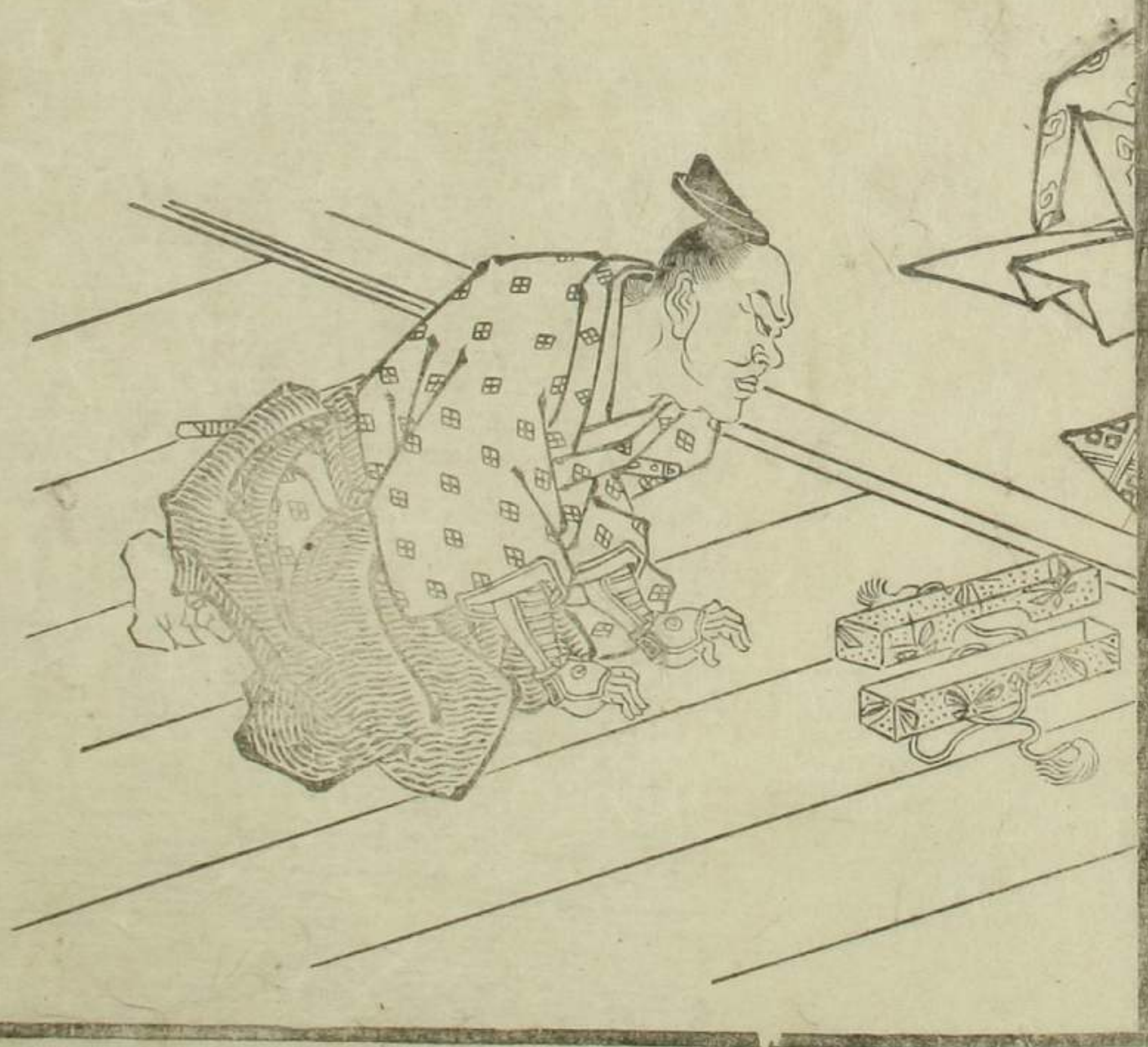
の裏ふ〜と〜り〜るふ〜と〜ら〜と〜あそ
ぢりりるる重氏が妻と子の石堂丸とあそ
〜るものありま〜かあちあつ尉重氏と〜ら〜ら
時頼が父の齋後ち末門を又茂頼を〜と〜ら〜ら
〜ら〜るる名を〜るる〜

芳野海の後推

前條ふ〜と〜る今人武里ハ中おの居依〜と〜
〜ら〜海ふ沈む〜と〜るを灘口入道ふ〜と〜る

えんや
維盛の仕方
屋敷の便を
得て勤めしむ
如

三
三



十三



ゆふもあやむりにすぎたまくりやむらじこの際よ
つひらきこたまふよ

あふいのうまらげらむんづむ我

がのゆきまらむとあつらるるのみなつらふ

あて自ふあつらつらまのびらまらあつら

さまよそふんまらつらまらつらまらつら

つて水方いよの中まらつらおむいまらつて編照

寺の奥小倉山の麓菖蒲谷の北お大覚寺とい

つとあらふまのびて三年北春秋をるまらひけ

つこの水方といふお申法つ大納言の女つら

男女の子二人おりつら男子は六代法前つて今

年十二お女子は十おあつら夜又法前といひつら

そはふ女房一人おあつらおあつら六といひ足付

ひてありつら北條四郎時改つてつらつらつら

六代法前をといつらつらつらつらつらつら

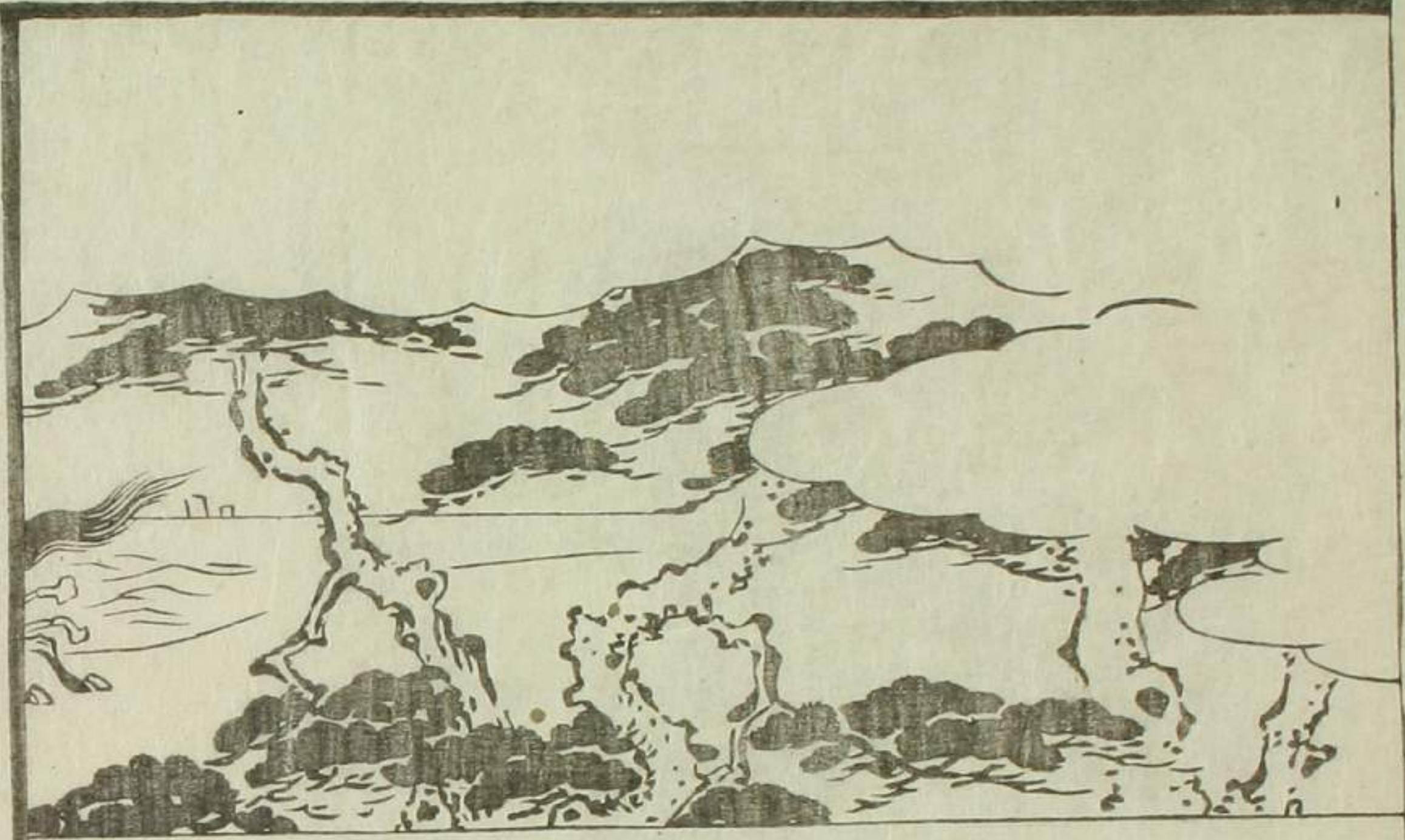
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

文鏡秘府
 のゆき書と
 文鏡秘府
 のゆき書と
 文鏡秘府
 のゆき書と

あつた三



十六



とららあてすぐふう〜なをむ〜ける時
雄との文ぶん覺かく上じやう人にんかま〜より免めんぶ〜をわらほ
わうてあやきいのちを〜をけ〜らうらうま〜ふ
らん翅そ上じやうの真ま北きた江え海かいあうらう刀やう下げはるの林りん叢そう
ふほ〜るら〜せられて六ろく代だいは前ぜんりな海うみらうつ
とよおん〜らうらう

き〜ん〜のむりのちふあら〜けさま
てちの才さいぞのらうら〜とよみてま〜たうみぞあぞ

おせをれらるか〜と人ひとおを〜てみやらう
のらうぬらも相あまみ〜て後のちと人の才さい子こ〜い
たうらうらう

今いま戲げ場ばう〜小こ令れい吾ご武ぶ里り〜らるもの雄おと
登のぼの津つ巻まき新しんと六ろく代だいは前ぜんの法はふ供く〜て
まのびて〜聖の路ぢを〜らうらる〜とま〜梶かぢ
原はら景けい時とき〜ら〜ふ追お討うちれ〜武ぶ里り〜ら〜ら
せ〜よ〜つ〜ら〜ら〜い今いま人ひと武ぶ里りが維い盛せい体たい

将の侍供しやうのざむらいとて熊野詣せしくまのまじり半なとて六代内ろくだいうちの
 小糸こいと不捕ふとらりまとてあそせとて例れいの侍ざむらいなり



画本ふる鏡二篇三冊 近刻

一 本ほんふるのいりけ 鶴岡の巻まきとて上

二 同 下

三 みまののみくらなま

鎌倉武鑑三編二冊 同

同 四編二冊 同

三都

書肆

同浅草茅町二丁目	同同通四丁目	同同通一丁目	同・同	同日本橋通二丁目	同本石町十軒店	同中橋廣小路	江戸芝神明町	大坂心齋橋安堂寺町	京寺町通松原
須原屋伊八	須原屋佐助	須原屋茂兵衛	小林新兵衛	山城屋佐玄衛	英大助	西宮彌兵衛	岡田屋嘉七	秋田屋太右衛門	勝村次右衛門

